

<Interview> Interview with Taichi Yamada (1) :
About Ghost Stories, Strange Phenomenon
Stories and Strange Stories

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三浦, 正雄, 馬見塚, 昭久 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/181

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



インタビュー

山田太一氏へのインタビュー（1）

— 怪談・怪異譚・不思議譚をめぐって —

Interview with Taichi Yamada (1)

About Ghost Stories, Strange Phenomenon Stories and Strange Stories

質問 三 浦 正 雄・馬見塚 昭 久

MIURA, Masao MAMIZUKA, Akihisa

回答 山 田 太 一 氏

○今日は、記録的な猛暑のさなか、お越しくださりありがとうございました。それでは、インタビューを始めたいと存じます。初めに、先生が現在手がけていらっしゃるお仕事について、お尋ねしたいと存じます。

山田) エッセイ集がもうすぐ出ます。それから、僕の本ではないんですけど、寺山修司¹⁾さんとは大学の同級生なんです。寺山さんが僕にあてた手紙というのが、あるんです。寺山さんと最後に一緒にいた田中未知さん、「時には母のない子のように」という歌の作曲をした女性がオランダで暮らしておられたのですが、最近、戻っていらして、私宛の寺山さんの手紙がいっぱいあるんで、それを本にしたいと仰るんです。私の手紙は、そんなにないんですよ。寺山さんの手紙のコピーですけどね。それを本にしたいと言ってこられて、僕宛ではあるけど、僕の出した手紙はないから、僕がとやかく言うのもなんか変でしょ。懐かしいことは懐かしいので、私も、事実関係などわからないところを少しお教えして、最後のゲラを渡すところなんです。岩波から出ます。あとひと月くらいでしょうか。

寺山さんは、いろんな人に手紙を書いているの

に、僕宛の手紙ばかりを本にするっていうのも図々しい気がするんですけど。田中さんがこれだけまとまっているんだから、きっと読んでくれる人がいるからって仰るんで、結局、出すことになったんですね。寺山さんは、二年生の時に病気になって入院なさったんですよ。学校の帰りに寄れる病院だったんです。とても残念で、毎日のようにお見舞いに通っていたんですよ。そうしたら、怖いお母さんがいらして、「修ちゃんは重病なんだから、毎日来て喋っちゃダメ」って言うんです。寺山自身は来てほしいんですよ。それで困って、手紙を書いて渡してくる。前の日に僕が書いた手紙を、寺山が読んで返事を書く。しょっちゅうやって、それで手紙がたまっちゃったんです。読み返すとちょっと切ないっていうかな。少年時代後期みたいなところがあって、頭でっかちで、本の読み過ぎじゃないかって反省していたころの手紙です。

○エッセイ集は、どちらから出されるのですか。

山田) 河出書房です。ここ10年ほどに書いたもので『夕暮れの時間に』というタイトルです。それに続けて前に出したエッセイ集が何冊かあって、それをセレクトして文庫で三冊出すという企画が続

キーワード：山田太一、怪談、怪異

Key words : YAMADA Taichi, ghost story, strange phenomena

きます。

○前のエッセイ集は、面白く読ませていただきました。

山田)『月日の残像』は連載でしたから、ある種のまとまりがあった。今度、河出から出るのはその70代にいろんなところに書いた文章を集めて河出が出したいということになったんです。

それから、テレビでは悲しみ主題のドラマをぜひ書いてみたいと考えています。それはまだ、発表の段階じゃありませんけど。

○楽しみにしております。それでは、今日のインタビューのメインテーマに入ります。先生が怪異を描かれるようになったきっかけは、何でしょうか。

山田) 私がテレビドラマを書くようになった当時は、わりとハッピーで和やかなドラマが多かったんですね。

しかし、どんどん現実と離れていってしまっているという感触があって、本当はどうかという問いかけをする形でドラマに入っていったんです。普通の家庭、お父さんの知性とお母さんの情、そしてお爺さんお婆さんの老人の知恵とで、もめ事が円満に解決していくまでの物語が多かったんですね。でも、現実には僕が書き始めた頃には、そんなに爺婆と同居している例は少なくなり、核家族・一戸建てが実現し始めていた頃だったんです。端から見ていると成功例に見えるんですけど、内情はお父さんはうちへ帰ってこれないほどハードだったし、お母さんの職場というのはあまりなかったですね。子供も、大学に行く人は一握りだったのに大多数が行くようになって、他で個性を発揮できるような人もとりあえず大学に行くようになった。女の子の生活スタイルは、文学、音楽、アメリカが目撃したいところがあった。

そういうところで、親との接点もどんどん無くなっていったし、要するに、そういうリアリズムを書こうとしたんですね。はじめはそんなにリアリズムの欲求があるとは思わなかったんですけど、

それ以外に自分が書いて突破できるような世界が思いつかなかったんです。

しかし、時にリアリズムが息苦しくなってきたんですね。物語ってというのはそれだけじゃないだろうと。何か嘘が書きたくなったのね。それで最初に書いたのが、『終りに見た街』。これははじめ小説を書きました。

戦争体験が失われていくから、こういう戦争があったんだということを書かないか、というお話があったんですけど、ノンフィクションはいっぱいあるわけです。もうみんな、戦争の話なんかいいよ、という空気になっていたんです。そういうとき、普通のフィクションやノンフィクションと違うものを書くためにはどうしたらいいだろうと考えて、現代のある家族が、昭和19年にタイムスリップしてしまう話にしました。そうすると、持っている戦後の電気製品などを隠さないと、何者だということになってしまいます。戦争中の日本に、いまの家族が生き始めるという話です。これなら少し身近に感じるんじゃないかと思って。それを書いたら、テレビでもやりたいという局があって、十年後くらいにやったんですけどね。タイムスリップなんてやたらあるんだけど、あのころの僕にとってはとても新鮮だったのね。

○『飛ぶ夢をしばらく見ない』²⁾で、女性の若返りを題材とされた経緯をお聞かせください。

山田) とんでもないフィクションを書けないかな、と思って。今の人は老齢は悲しいけど、若いことは悲しくない。それじゃあだんだん若くなっていく話を書いてみようと思ったのね。若くなっていくと、最後には生誕までいっちゃうわけです。精子と卵子になっちゃう。逆行していくから、先が見えるじゃないですか。どんどん若くなっていくことを嘆く、悲しむ話を書いてみよう、と思ったんです。女性が幼女になったら、男は中年ですから不思議な性関係になるでしょ。書くのが楽しかったですよ。超自然の話を書こうとしたのではなくて。一種の着想ですね。

○発想を先に思いつかれて、物語にそれを入れると、ストーリーが自然に進行していくわけですね。

山田) そうそう。思いがけないことが起こるんですね。老婆が高校生くらいになってしまった時に男は中年のままですから、恋人同士だといったら怪しまれるんですよ。楽しかったですね。

○『異人たちの夏』³⁾について、お尋ねします。どういうきっかけで生まれた作品なのでしょうか。

山田) テレビドラマを書いているのに、一方で小説の約束をしていて締め切りが近づいてきたんです。ドラマは正月の特番みたいなものだったのですが、小説も雑誌に一挙掲載という約束でした。すぐ書かなきゃならない。ところが、テレビドラマを書き終えたら、頭が空っぽになっちゃったんです。すぐ小説を一冊分ぐらい書くというわけにはいかなくて困ってしまったんです。

ある日、銀座を歩いていて、ふっと地下鉄に降りる出入り口が目に入ったんです。それに「浅草」って書いてあった。何かね、浅草と呼ばれた気がしたんです。僕は、浅草が故郷ですから。そういえばずいぶん行ってないな、と思った。かつては国際劇場という大きな劇場があって、今でもその前の道は国際通りと言いますが、その通りを隔てたところに私の家、故郷があったんです。国際劇場の跡にできたのが浅草ビューホテルで、苦しまぎれにそのホテルを予約してそこで書くと思って入ったんですよ。でも、何のプランもないから、入ったって何も書けない。

そこで、その夜、木馬館⁴⁾っていったかな、旅回りの劇団がやっている劇場があったんです。六区からちょっと観音様寄りにあったんですけど。旅回りの一座を久しぶりに見てみよう、と思って入ったんです。もう時間が過ぎていたから、最後の出し物も途中までやっていて、しんとしているんですよ。切符売り場のおばさんが、今からなら千円でいいわって言うてくれて、木の階段を上っていったところが、ドアを開けたら満員なんです。老人老婆で。結構、みんな盛り上がっている。これは驚きましたね。もう八時過ぎとか、そ

ういう時間ですね。でも、残念ながら旅回りの一座は本当に決まりもので、ちっともおろしろくなかった。出ようかなと思ったけど、一応隅のほうに座って見ていたら、斜め前に、亡くなる頃の父の後ろ姿にすごくよく似た男がいたんですよ。親父によく似た人がいるな、浅草だし、まさか幽霊が出るわけないしなと思いながら、不合理なことなんですけど、顔が見たくてしょうがなくなったんです。トイレに行くふりをして、前を通って顔を見たら、それはもう父とは似ても似つかなかったんです。でも、「ああ、これは書けるな。」と思いました。

故郷だし、生きるのに困っていたといったら大袈裟だけれど、物書きにとっては書くことがないというのは地獄なんですよ。それで、トイレに行かないで、そのまま外へ出ちゃった。ビューホテルに歩いて行って、向こうから親父が歩いてきて、「おお、お前、なにしてるんだ」とか、言ったらね。僕は、崩れ落ちて泣いちゃうんじゃないか、と思ったのね。ドラマも小説も、書くというのは、良くも悪くも一人なんですね。誰かのせいにするわけにはいかない。書くことがないぞという時には、とても辛い時がある。その時、ここで、「あつ、お父さん」とか言って、「おお、ビールでも飲むか」なんて想像が膨らんでいっちゃったんです。「あつ、これは書ける。」と思って、それで一気に書きました。

○すごく完成度の高いホラーでした。次に、『遠くの声を捜して』⁵⁾について、お尋ねします。

山田) 学生時代に失恋したことがあって、山手線に昼間、夏、乗っていたら、電車がものすごく満員なんですよ。当時の原宿駅は、乗る人のあまりいない駅だったんです。山手線が止まってドアが開くと、蟬の音がわーっとして、人は余り降る人も乗る人もいないんですよ。満員なのにシーンとしている、こんなに電車って静かなんだ、って思いました。で、僕は、失恋でまいってたんで、こんなに人がぎっしりいて誰も何もいわないという現実を打ちこわしたくなったというのかなあ。僕がもし心底から、心をこめて「私と同じ寂しい人い

ませんか。いたら心でいるよ」といってみて下さい。その心の声は私の心に届くかもしれない、と。すると、聞こえてしまったという人がいたら、そんなばかな空想から書いたんですよ。

そしたら、河合隼雄さんが『異人たちの夏』をほめてくださっていて、その後の新作ができたというのでこれもお読みくださり、これは分裂病になる初期の症状で、それを小説に書きましたね、と⁶⁾。私は、全くそんなことを考えたこともなくて。じゃあ、僕は分裂病でしょうか。いや、あなたはこれを書いたから助かったんじゃないかって。

○心理学的に見ても、とても良くできていると、河合先生がほめていらっしゃるでしたね。

山田) ええ、でも、僕は全くそんなことは考えていなくてね。ただそんなことで物語ができていったんです。ですから、三部作ともどれも書く動機は神秘的なことではないんです。

○先生が脚本をお書きになり始めた当初は、和やかなステレオタイプの家族像を描くという流れがあった。それを息が詰まるように感じられ、打ち破ろうとなさった。『岸辺のアルバム』⁷⁾も、その流れの上にあったかと存じます。しかし、リアルズムで過去のドラマを打ち破ることに、物足りなさを感じられたのですね。

山田) そのラインでずっと行くのはつまらないと思ったんです。営業的にもね。テレビ局も今はわりあいファンタジーを受け入れる傾向があるけど、その頃はSFやファンタジーっぽいものはお客さんは喜ばないという先入観があったんです。結局、小説で書いたのは、テレビで企画を出したって受け入れられないだろうと思ったからなんです。テレビでは企画会議をして、やるかどうか決めますでしょ。小説の場合は編集者がわかってくれば、それで書き出せちゃう。テレビの場合は、恋人同士がいて片方がだんだん若くなっちゃって、なんて言ったら、もうそれでダメと言われちゃう。企画が通りっこないと思ったから、小説に書いたん

です。

私が書いたものはホラーではない、自分が書きたいと思って書いたんですね。だから、僕の内部にそういう欲求があって、それは僕だけであるはずがないから、きっと共感してくれる人があるだろう、と思ってはいました。河合さんをはじめとして思いがけない人が読んでくださって、おもしろいと言ってきて、映画にもなって。でも、そっちのラインだけでずっと行こうとは思わなかったですけど。

注

- 1) 寺山修司…1935年—83年。歌人、劇作家。代表作『田園に死す』。劇団天井桟敷主宰。
- 2) 『飛ぶ夢をしばらく見ない』山田太一作。新潮社。1985年。
- 3) 『異人たちの夏』山田太一作。新潮社。1987年。山本周五郎賞・日本文芸大賞。
- 4) 木馬館…東京浅草にある大衆劇場。東京大衆演劇協会が運営する。
- 5) 『遠くの声を探して』山田太一作。新潮社。1989年。
- 6) 『こころの声を聴く 河合隼雄対話集』河合隼雄著。新潮社。1995年。
- 7) 『岸辺のアルバム』連続テレビドラマ。TBS系。全15回。制作…大山勝美。原作・脚本…山田太一。出演…八千草薫・杉浦直樹・中田喜子・国広富之、他。1977年。

注記) 本稿は、2015年7月31日に川崎市にて、三浦・馬見塚が山田太一氏にお会いして、直接インタビューした録音を活字におこし、読みやすい形にするため若干の編集を加えたものである。